

基調講演

日時：2021 年 8 月 19 日（木） 13:30～15:30

方法：オンライン ZOOM

Student Success のための学習支援のありかた

（次世代大学を創るための 21 の提言）

プログラム

司会：仲道 雅輝（愛媛大学）

1. 講師紹介

鈴木 克明（熊本大学 教授システム学研究センター教授

熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻（兼任））

講師略歴

学位：博士（教授システム学）（フロリダ州立大学（アメリカ合衆国））

経歴：ibstpi@フェロー・元理事（2007-2015）、日本教育工学会監事・第8代会長（2017-2021）、教育システム情報学会顧問、日本教育メディア学会理事・第7期会長（2012-2015）、日本医療教授システム学会副代表理事、日本イーラーニングコンソシアム名誉会員など。

主著：「学習設計マニュアル（編著）」、「インストラクショナルデザインの道具箱 101（監修）」、「教育デザイン研究の理論と実践（監訳）」、「学習者中心の教育を実現するためのインストラクショナルデザイン理論とモデル（監訳）」、「研修設計マニュアル」、「教材設計マニュアル」、「教育工学を始めよう（共訳・解説）」、「インストラクショナルデザインの原理（共監訳）」、「学習意欲をデザインする（監訳）」、「インストラクショナルデザインとテクノロジー（共監訳）」など。

ウェブサイト：<http://www.gsis.kumamoto-u.ac.jp/ksuzuki/suzuki-j.html>

Student Success のための学習支援のありかた (次世代大学を創るための 21 の提言)

鈴木 克明 A

1 はじめに

コロナ禍でキャンパス閉鎖となった大学ではオンライン授業が強いられ、本大会も1年延期の開催となった。多くの困難に直面した反面で、教員のICT活用経験が飛躍的に向上し、また本来大学で醸成すべき自己調整学習力への注目も集まった。コロナ禍でのオンライン授業は、一過性のものであり、緊急避難措置であった。しかし、コロナ禍が過ぎた近未来（ポストコロナ）においては、オンライン授業をコロナ前の対面授業に戻すのではなく、また、大学全体をコロナ前の状態に戻すのではなく、コロナ禍での経験をワンランク上の大学づくりに活かし、Society 5.0に向けた次世代の大学づくりを目指す好機と捉えるべきであろう。

筆者は、そういう志を掲げて改革に取り組む大学が増えることを期待するとともに、そうする大学とそうしない大学との格差が広がるだろうと予測する。コロナ禍における混乱は、オンライン化によってもたらされたというよりはむしろ、コロナ禍以前の大学改革への取り組みの差異が、オンライン化によって顕在化したものである¹⁾。コロナ禍以前の社会が「戻りたいと願うほど良いものではなかった」ことを経済学者コトラーが指摘した²⁾。皆、貧乏であったし、多忙であった。コロナ禍以前にもパンデミックが世界を変貌させてきたように、コロナ禍によって「ニューノーマル」が持たられる。社会全般がそうであるならば、改革が遅延してきた我が国の大学には、相当の覚悟をもって、次世代への道を選択することが求められる。今変わらずして、いつ変わることができるだろうか。

本発表では、大学生を成長させる次世代の大学創りを目指すための提言を21にまとめて報告する。さらに、オンライン授業を経験した大学生を再びキャンパスに惹きつける魅力をどう実現するか、遠隔教育研究からの示唆を考察してみたい。

2 教育改善スキル修得オンラインプログラム

2.1 開発の経緯

熊本大学教授システム学研究センターは、「教授システム学に基づく大学教員の教育実践力開発拠点」として文科省教育系大学間共同利用拠点の一つとしての活動を開始した。2019年4月より、日本全国の大学教員と大学院生を対象として提供するオンラインプログラムの一環として構想した「教育改善スキル修得オンラインプログラム」の第一弾「科目デザイン編」³⁾、第二弾「自律学習支援編」⁴⁾の無料版・有料版を順次公開してきた (<http://kyoten1.cica.jp/moodle/>)。

これまでの多くの大学における教職員職能育成プログラム(FD)は、現在の大学での職能を発揮することに留まっていると考えられる限界を意識し、現状への適応ではなく次世代の大学を構築していく教員になる準備と位置づけた挑戦的な内容とすることを目指してきた。その基盤には、2006年4月に開設以来、「教え方を教えます」を標榜して150人以上の博士課程前期修了生を輩出してきたオンライン大学院「教授システム学専攻」(以下、GSIS)での教育実践⁵⁾とその背景にある教授設計学(以下、ID)⁶⁾がある。IDの研究成果に基づき、GSISでの実践で効果が確認できた方法をもとにすると、どんな設計指針で次世代の大学をデザインすべきか、という問いを自らに課し、その成果を具体化したものである。

2.2 「科目デザイン編」の概要

教育改善スキル修得オンラインプログラム「科目デザイン編」は、表1に掲げる5つの物語からなる導入的モジュール1つと、科目デザインの3つの主要要素である授業方法・評価方法・学習目標についてのデザイン提案をまとめた3つのモジュール、ならびに「科目デザイン編」での学習を自分の担当科目に活かす計画を検討する最終モジュールの5つで構成されている。

A: 熊本大学教授システム学研究センター

表1 大学教育に関する5つの物語(モジュール1)

物語1:『教材設計マニュアル』をめぐる物語(講義と期末試験不要論)	ここでは、講義と定期試験を止めるという大学改革について考えてみましょう。
物語2:出入口と成長プロセスの設計(3つのポリシーで何が変わったか)	ここでは教育設計学の視座で大学教育全体を俯瞰してみましょう。
物語3:ストーリー中心型カリキュラムの実践(基礎からの積み上げを見直す)	ここでは熊本大学での実践を通して、基礎からの積み上げ以外にできないか考えてみましょう。
物語4:『学習設計マニュアル』で学生の自立を促す(教えない教員になる)	ここではテキストのあとがきを読んで、教えない教員になって自分で学ぶ学生を育てることを考えてみましょう。
物語5:ミネルバ大学の衝撃と10年先行していたGSIS(次世代の大学を想像する)	ここでは、世界に衝撃を与えた「ミネルバ大学」と熊本大学の完全オンライン大学院を比べて、次世代の大学像について考えてみましょう。
課題:次に来る時代を想像し自己変革への行動計画を立てる(有料ユーザーのみ)	次に来る時代の大学教員になるために、あなたはこれから何をしますか? 行動計画を立ててみましょう。

導入的モジュール1は、大学教育についての5つの物語を通じて、次世代の大学を想起する契機を狙ったものである。最初の3つの物語は、東北大学で収録・公開している講演ビデオ⁷⁾を資料として再利用した、いわゆる反転授業型の構造を採用した。実践事例の紹介を介して講義依存や基礎からの積み上げという常識への疑問を提起している。また、ビデオがなくWeb上の資料とテキストの読解へ展開する物語4と5では、ビデオ依存の発想からの解放を目指す意図を説明すると同時に、学生主導で学び方を学ぶ学生用テキストを教員も学ぶように誘っている。

表2に、本プロジェクトで提案している次世代の大学を創造するためのデザインのキーワードを掲げる。正解主義で受験勉強を突破して入学したが生徒のままで学生らしく振舞えない「高校4年生」を学生らしく成長させるためには、認知的発達を促す授業方法を採用する必要がある。知識の暗記と試験一発勝負が単位取得につながる基礎科目の評価方法も見直す必要がある。そして、基礎からの積み上げというアプローチを脱して、入学直後から学習目標を高度化していく必要がある。文科省の推奨するアクティブラーニングは授業方法改革であるが、それに伴う学習目標の高度化と評価と単位認定の見直しが三位一体となることで、本

当の意味での大学改革が実現し、次世代の大学授業がデザインできる。これはIDでは50年前から提言されてきた整合性担保のための「メーガーの3つの質問」であり、本プログラムにおける中核的提案として採用している。モジュール2～4は、3つのモジュールとも同じ大学授業の事例を取り上げて提案を解説し、提案一つひとつが適切に用いられているかどうかを問う練習問題と、どの提案が用いられているか、それぞれが適切かどうかを問う複合問題と実力チェックテストが用意されている。

表2 次世代大学に向けてのデザイン提案

認知的発達を促す授業方法(モジュール2) 1. 努力と真剣さを求める 2. しゃべるのは1割まで 3. 大事なことは3回はやる 4. 一人で行えることは授業ではやらない 5. 個人→グループ→個人 6. パラレルセッション 7. ルーブリックの前にチェックリスト 評価と単位認定の見直し(モジュール3) 1. 再提出可 2. 多段階評価 3. 持ち込み可 4. 問題開示 5. ポートフォリオ 6. 相互レビュー 7. LMSでテスト 学習目標の高度化(モジュール4) 1. 学問領域を鳥瞰する 2. 歴史をさかのぼる 3. 現実場面での活用を試みる 4. 複数の視点から分析する 5. 自分でコミットする段階に誘う 6. オリジナリティを求める 7. 学び方を学ぶ目標を追加する

2.3 自律学習支援編の概要

「自律学習支援編」は「科目デザイン編」と同様に5つのモジュールで構成した(表3)。「科目デザイン編」の続編と位置づけ、次世代の大学についてのイメージづくりと学習目標の高度化、評価と単位認定の見直し、そして認知的発達を支援する授業方法についての7つずつの提案を検討し、現在担当している、あるいは将来担当することが想定される授業をどのように再設計するかをすでに検討済みである者を対象として構成した。

表3 「自律学習支援編」の5つのモジュール

モジュール	テキスト
1：学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくる	『学習設計マニュアル』第一部（第1～5、16章）
2：自学自習を促すICT活用	鈴木（2013） ^④ を発展させて独自開発
3：学びの場をつくる	『学習設計マニュアル』第二部（第6～10章）
4：学習スキルを学ぶきっかけをつくる	『学習設計マニュアル』第三部（第11～15章）
5：最終課題：自己変革への行動計画を立てる（有料のみ）	『学習設計マニュアル』第19章（第四部）

「科目デザイン編」でテキストとして用いることを予告して「あとがき」のみを利用した大学1年生向けの教科書『学習設計マニュアル』^⑧を、「自律学習支援編」では、主たる情報源として採用した。モジュール1、3、4は、大学生向けのテキストを読むことで、自律学習を支援するために教員ができることは何かを検討することを目指し、担当科目でどのように取り入れる可能性があるかを検討する要素を盛り込んだ。モジュール2はICT活用を自律学習支援の観点から7つの活用提案にまとめ、本センターのeラーニング推進室で提供してきたMoodle活用ノウハウ集をリンクした形で独自開発した。モジュール5は、これらの検討

結果をまとめ、自身の担当科目を変えていく方法を検討し、その実現に向けての活動計画を立案する最終課題とした。「科目デザイン編」と同様、自動採点が可能な部分は無料公開し、それ以外を履修証明制度の枠組みで有料講座化した。また、プレFDプログラムとして大学院生を対象とした科目化も実現した。

表4に、「学生に自分の学びと向き合うきっかけをつくる提案」を7つ、表5には、「自学自習のためのICT活用の提案」を7つを例示する。テキスト各章で大学生に身につけることを推奨した考え方やノウハウを大学教員が意識することによって、自律的な学習が求められる場面が増え、その結果、自律的な学習者がより多く育ってくれることを期待して提案したものである。

入学したが学生らしく振舞えない大学生を対象にスタディスキルを習得させるための入門科目を設置する大学が増えている一方で、その試みが大学全体の教育の在り方や目指す卒業者像にまでつながっていない例が多い。入門科目に限らず大学のすべての科目で徐々に自律的な学習者に育てる継続的な試みが必要であるというスタンスで、提案をまとめた。

これからの大学には、大学が学校化し、学生が生徒化する流れに逆行する努力が求められており、そのためには、大学全体で自律的な学習を求め、それを支援

表4 学生が自分の学びと向き合うきっかけをつくるデザイン提案(モジュール1)

7つの提案	内容
大学を学校にしない（で学生に育てる）	学生をどんな点でどこまで大人扱いするのかについて自分の考えを伝える
学びのオプションを広げる	学生の学びを広げていくオプションが用意できそうかを考えて取り入れる
学生に自分のライフスタイルと学習スタイルを意識させる	人生で何を重視するのか、学ぶ方法の得手不得手を意識させる
学び方のヒントを伝授する	学んできた先輩として、自分の学びで得てきたヒントを伝授する
深い学びに誘う	ベリーの発達段階のより深い学びに誘うことで自律的な学習を支援する
学問分野の特徴と学び方を伝える	学問領域から多くの収穫を得るための8つの質問を投げかける
将来に向けた学びの要素を入れる	「将来に向けた学び」の要素を探し、なければ内容や方法を変える

表5 自学自習を促すICT活用のデザイン提案(仮)(モジュール2)

7つの提案	内容
講義ビデオ公開で講義をやめる	学習する場所と時間と速度を自由にすることで自律的な学習を支援する
資料をオンライン上にアーカイブする	授業で使う様々な資料を公開して学生の主体的で能動的な活用を促進する
リンク集の閲覧・作成・更新で情報収集させる	現実世界との関連を示し、個々の興味に応じて内容に広がりを持たせる
自動採点小テストを出席代わりにする	実施の手間いらずで頻繁に組み込み、便利で学習効果も期待できる
掲示板で相互に学びつつオリジナリティを発揮させる	好きな時に書き込み、自由に交流できる場所として便利なアイテム
ポートフォリオで自己アピールさせる	学習成果を振り返り、今後何に活用できるのかを考察・アピールさせる
オンラインで共同作業させる	グループ共同作業をオンラインで行い授業外での自律的な学びを支援する

- 1) 吉見俊哉 (2021) 『大学は何処へ 未来への設計』岩波新書 新赤版 1874
- 2) [コトラー教授緊急寄稿「新型コロナ、ニューノーマルつくる契機に」：日経ビジネス電子版 \(nikkei.com\)](#)
- 3) 鈴木克明・喜多敏博・平岡斉士・長岡千香子 (2019.9) 教育改善スキル修得オンラインプログラム(科目デザイン編)の構想と無料版・有料版の公開. 第 44 回教育システム情報学会全国大会 (静岡大学) 発表論文集, 425-426.
- 4) 鈴木克明・喜多敏博・平岡斉士・長岡千香子・山下藍・張曉紅 (2020.9) 教育改善スキル修得オンラインプログラム第二弾「自律学習支援編」の構想. 第 45 回教育システム情報学会全国大会 (オンライン) 発表論文集, 51-52.
- 5) Suzuki, K. (2009). From Competency List to Curriculum Implementation: A Case Study of Japan's First Online Master's Program for E-Learning Specialists Training. *International Journal on E-Learning*: 8 (4), 469-478.
- 6) 鈴木克明 (2017) 教授・学習過程の革新－教授設計論 (Instructional Design) の視座からの提言－. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要 3:13-26.
- 7) <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/archives/detail.php?id=56>
- 8) 鈴木克明・美馬のゆり (編著) (2018) 『学習設計マニュアル：おとなになるためのインストラクショナルデザイン』北大路書房
- 9) 鈴木克明・平岡斉士 (2021.3) 「[ICT を活用した授業デザイン原則の提案-交流距離理論の足場かけ総量再解釈に基づいて](#)・(特別寄稿)」『名古屋高等教育研究』第 21 号, 143-165.
- 10) 鈴木克明・美馬のゆり・山内祐平 (2011) 大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか：学習センター関連資格制度についての米国調査報告. 日本教育工学会研究論文集 11-1:181-186.